

旧聞日本橋

町の構成

長谷川時雨

青空文庫

一応はじめに町の構成を説いておく。

日本橋通りの本町ほんちょうの角からと、石町こくちょうから曲るのと、二本の大通りが浅草橋へむかつて通っている。現いま今は電車線路のあるもとの石町通りが街の本線まちになっているが、以前は反対だった。鉄道馬車時代の線路は両方にあつて、浅草へむかつて行きの線路は、本町、大伝馬町おおでんま、通旅籠町とおりはたご、通油町とおりあぶら、通塩町とおりしおとつらなつた問屋筋の多い街の方にあつて、街の位は最上位であつた。それがいまいう幹線で、浅草から帰りの線路を持つ街の名は浅草橋の方から数えて、馬喰町ばくろ、小伝馬町こでんま、鉄砲町、石町と、新開の大通りで街の品位はずつと低く、徳川時代の伝馬町の大宰の跡も原っぱで残っていた。其処そこには、弘法こうぼう大師だいしと円光えんこう大師だいしと日蓮にちれん祖師そしと鬼子母神きしぼじんとの四つのお堂があり、憲兵屋敷は牢屋敷裏門をそのまま用いていた。小伝馬町三丁目、通油町と通旅籠町の間をつらぬいてたてに大門おもん通がある。

そこで、アンポンタンと親からなづけられていた、あたしというものが生れた日本橋通油町というのは、たった一町だけで、大門通りの角から緑橋の角までの一角、その大通りの両側が背中にした裏町の、片側ずつがその名を名告なつていた。私は厳密にいえば、小伝

馬町三丁目と、通油町との間の小路の、油町側にぞくした角から一軒目の、一番地で生れたのだ。小路には、よく、瓢箪ひょうたん新道しんみちとか、おすわ新道とか、三光横町とか、特種な名のついているものだが、私の生れたところは北新道、またはうまや新道とよばれていて、伝馬町大牢御用の馬屋が向側小伝馬町側にあった。この道筋だけが五町通して、本町石町から縁河岸みどりがしまで両側の大通りと平行していた。

面白くもない場所吟味はやめよう。以下、私の記憶のまままで、年月など、幾分前後したりするかも知れないが――

しかし、アンポンタンの生活がはじまったのも、かなり成長してからの眼界も、結局この街の周囲だけにしか過ぎない。で、最も多く出てくる街の基点に大丸だいまるという名詞がある。これは丁度現いま今三越呉服店を指さすように、その当時の日本橋文化、繁昌地はんじょうち中心点であったからでもあるが、通油町の向う側の角、大門通りを仲にはさんで四ツ辻に、毅然きぜんと聳そびえていた大土蔵造りの有名な呉服店だった。ある時、大伝馬町四丁目大丸呉服店所在地の地名が、通旅籠町と改名されたおり大丸に長年勤めていた忠実な権助ごんすけが、主家の大事と町札を書直して罪せられたという、大騒動があつたというほどその店は、町のシンボルになっていた。

問屋町の裏側はしもたやで、というより殆ど堀と奥蔵のつづき、ところどころ各家の非常口の、小さい出入口がある。女たちがそつと外出をする時とか、内密の人の訪れるところとなつてゐる。だからとても淋しい。私の家は右隣りが糸問屋の近与の奥蔵、左側は通りぬけの露路で、背中は庭の堀の外に井戸があり、露路を背にした大門通り向きの幾軒かの家の、雇人たちのかなり広くとつた共同便所があり、それを越して表通りの足袋問屋と裏合せになつてゐた。左横の大門通り側には四軒の金物問屋——店は細かいが問屋である、この辺は、鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春と、元禄の昔其角がよんだ句にもある、金物問屋が角並にある、大門通りのめぬきの場処である——その他に、利久という蕎麦屋、べつこう屋の二軒が變つた商売で、その家の角にほんとに小さな店の、ごく繁昌する、近所で重宝な荒物屋があつた。小さな店にあふれるほど品が積んであつた。

煩さくはあるが、もすこし近所の具合を言つておきたい。荒物屋の向つ角——あたしの家の筋向いに横つばらを見せてゐる、三立社という運送店の店蔵は、元禄四年の地震にも残つた蔵だときいてゐた。左横に翼がついていて木の戸があつた。内には縄や筥が入れられてあつたが、そのまた向う角が、立派な土蔵づくりの八百屋、後には冬は焼芋屋になり、

夏には氷屋になった。その店の焼芋はすばらしく大きかったので、遠くからも買いに来た。他処では見られないことは、この家、この店主蔵だけの住居で二階が住家であり、小さな物干場へは窓から潜り出していた。芋屋の並びはほとんど金物問屋ばかり、火鉢ばかりの店もあれば金だらいや手水鉢が主な店もあり、襖の引手やその他細かいものの上等品ばかりの店もあり、笹屋という刃物ばかりのとても大きな問屋もあった。銅、鉄物問屋はいうに及ばない。

大門通りも大丸からさきの方は、長谷川町、富沢町と大呉服問屋、太物問屋が門並だが、ここらにも西陣の帯地や、榭地などを扱う大店がある。

荒物やの正面向う角が両替屋で、奇麗な暖簾がかかっている、黒ぬりの※こういう看板に金字で両替と書いたのが下げてあった。その家はいつも格子がすつかりはまっています、黒い前掛けをかけた、真中から分けた散髪の旦那と、赤い手柄の細君がいる奇麗な小さな角店だった。その隣りが酒屋の物置と酒屋の店蔵で、そのさきが煙草問屋、煙管の羅宇問屋、つづいて大丸へむかった角店の仏具屋の庭の塀と店蔵だった。

あたしの家の真向こうに——三立社の尻にこの辺にはあるまじいほどささやかな、小さな小屋で首を振りながら、終日塩せんべを焼いているお婆さんがあった。その隣家はこ

んもりした植込みのある——泉水などもある庭をもった二階家で、丁度その塀を二塀ばかりきりとして神田上水の井戸があるのを、塩せんべ屋のお婆さんが井戸番をしているようなかたちだった。あたしの家の裏の井戸は玉川上水だった。

その二階家は「炭勘」という名の——炭屋勘兵衛とでもいったのだろう。 鼈甲細工屋

のになつていたが、黒い三中みすじの垂れ暖簾のれぬりに※の白ぬきのれんが、鼈甲屋とは思わせない入口もつとだった。尤もそこは青柳という会席料理おちややだったのだそうで、炭勘はその後うしやから前へ進入したのだ。お茶屋があつたからというわけではなからうが、その隣りに阪東三弥吉という女の踊りの師匠そはがいた。その側そばに、私の父の俵くるまをうけもつて、他に曳子ひきこを大勢おいていた俵宿くるまやどがあつた。

なんで細かく此処ここまで書いたかというに、前にも言ったように、私の家のならばは、窓ひとつもない、塀と土蔵裏と、荷蔵にぐらばかりつづいていてその向う側であるからで、俵宿までの町並は二間半たらずだが、そこからぐつと倍も広がっている。それが、何故なぜかという、三誠社という馬車うまぐるまを扱う大きな運送店があつて、その前身が、伝馬町の大牢の、咎人とがにんの引廻しの馬舎うまやだったというのだ。町中まちばが其処そこだけ広がっているのが妙に嫌な気持ちにさせる。俵宿と馬舎との間の地処にかこいをして草を植え、植木棚をつくり、小さ

な祠ほこりを祭つて、毎朝表通りの店から散歩にくる老旦ろうだん那もあつた。

アンポンタンが三ツか四ツの時、額ひたいの上へ三日月形の前髪まへかみの毛をおいた。それまでは中な剃りかそ（頭の真ん中へ小さく穴をあけて剃っていること）をあけたおかつばで、ヂヂツ毛とおやつこさんをつけていた（ヂヂツ毛は頸えりのボンノクボに少々ばかり剃り残してある愛敬あいきよ毛うけ、おやつこさんは耳の前のところに剃り残したこれも愛敬毛）。そのほかは青く剃りあげていたのへ、小さいお腕わんを伏せて恰好かっこうのよい三日月形を剃り残したのだ。その時向うのせんべやお婆さんが、剃刃をあてるのに動かないようにと、おせんべにするふかしたしん粉こをもつて来てくれて、あたしの祖母が、狝ちんを拵こしらえて紅べにで色どつてくれた。それに味をしめて、さかゆきをするたんびに、おせんべやの店へとりにゆくと、首振り婆さんは、私の家の門の桜の木の上へ出そめた三日月を指さして、

「のん、のん、此処ここにも、あすこにも。」

と、あたしの頭を指で押して、空をも指さすのだった。

お婆さんの息子は車力しやりきだった。あたしは鹿かの子絞こしぼりの紐ひもを首うしろの後でチヨキンと結んで、緋金巾ひかなきんの腹がけ（金巾は珍らしかったものと見える）、祖母おばあさんのお古ふるの、紹ろの小紋こもんの、袖の紋のところを背にしたちゃんちゃんこを着せられて、てもなくでく人形のおつくりで

ある。

——ある時（妹でも出来た時かも知れない）、理髪店かみゆいどこではじめて剃ってもらった時、私ははじめじぶくつたが、あたしを抱いていた女中が大層機嫌がよかつたので、しまいはあたまで悦よろこんで膝の上で跳ねた。職人はたぶん女中の頸えりをおまけに剃ってやっていたのであろうが、あたしがあんまり跳はねるので、女中にもなんしよで、ひよいと、あたしのお奴やつこを片つぽとつてしまった。あたしはなおさらよろこんだ。機嫌のよい女中におぶさつて帰つてくると、すぐおせんべやの首振りお婆さんに見せにいった。ただ笑つて、よろこんで指で毛のないあとを押し示した。

「あらまあ、お供ともさんが片つぽおちて——」

お婆さんは齒のない口を一ぱいにあいて笑つた。だが、この人は直じきなくなつて、おせんべやは荷車の置場に、屋根と柱だけが残されるようになった。竹であんだ干籠ほしかごに、丸いおせんべの原形が干してあつたのも、その傍かたわらにあたしの着物を張つた張板はりいたがたてかけてあつたのも、その廻りを飛んでいた黄色の蝶と、飛び去つてしまった。

角の芋屋がまだ八百屋のころ、お其そのという小娘が店番をしていた。ちいさい時、神田から出た火事で此処ここらは一嘗ひとなめになつて、みんな本所ほんじよへ逃げた時、お其は大溝おおどぶにおちて

泣き叫んでいたのをあたしの父が助けあげて、抱えて逃げたので助かったといつて、私の赤ん坊の時からよく合手をして遊ばせてくれた。だが、先方も正直な小娘である。店番をしている時、無銭でとつていつたら泥棒とどなれと教えこまれていた。あたしはまた、お金というものがある事を知らず、品物は買うものだとということをおちつとも知らなかった。他人のものも、自分のものも、所有ということを知らず、いやならばとらず、好きならばとつてよいと、弁えなく考えていたと見え、ばかに大胆で、げじけしをおさえて見ていたが、急に口へもつてゆこうとして厳しく叱られたりしたというが、その時も、お其の店の赤いものに目がついて、しゃがんで二つ三つとつた。お其はだまって見ていたが——たんばほおずきが幾個破られて捨られてもだまって見ていたが、そのまま帰りかけると、大きな声で、

「盗棒、盗棒、盗棒——」

と喚きだした。もとより、あたしもお其にかせいして、盗棒とどなった。

諸方から人が出て来たが盗棒はいなかった。するとお其はあたしに指さして、

「盗棒！」

と言った。幼心にはずかしさと、ほこらしきで、あたしはにかみながら、

「盗棒！」

とおうむがえしに言った。みんなが笑った。あたしの祖母がお棲をとって来て、巾着からお金を払い、お其にもやった。八百屋の親たちはしきりにおじぎをした。

おせんべやの首振婆さんが私を抱えて帰った。お其も遊びについて来た。

間もなくべつたら市の日が来て、昼間から赤い巾をかけた小さな屋台店がならんだ。こんどはお其があたしの後について、肩上げをつまんで離れずにいた。祖母や女中が目を離すと、コチヨコチヨと人ごみにまぎれ込んで、屋台のものをつまむので、そのたびにお其はハラハラしたのだろう大きな声で祖母をよんだ。祖母はニコニコして後からお鳥目を払って歩いて来た。

お其のうちは八百屋をやめて焼芋屋になった。店の大半、表へまで芋俵が積まれ、親父さんは三つ並べた四斗樽のあきで、ゴロゴロゴロゴロ、泥水の中の薩摩芋を棒で掻廻わした。大きな、素張らしく美事な焼芋で、質のよい品を売ったので大繁昌だった。三ツの大釜が間に合わないといった。近所が大店ばかりのところへ、遠くからまで買ってくるので、いつも人だかりがしていた。一軒のお茶受けにも、店の権助さんが、籠をもって来たり、大岡持ちをもってくるので、一釜位では一人の注文にも間にあわなかった。

忙しい忙しいとお其はいつて、鼻の横を黒くしていた。で私の遊び合手は、私をも釜前につれていった。冬などは、藁の上ですわつて、遠火に暖められていると非常に御機嫌になって、芋屋の子になつてしまいたかつた。だが、困つたことに家の構造が、角の土蔵なので、煙のはげばに弱らされていた。住居にしている二階の上り口へまっすぐに煙筒をつけて、窓から外へ出すようにしてあつた。だから、二階の梯子はとりはらわれて、あたしたちの暖つている頭の上を、猿梯子をかけて登つてゆく、物干場は、一度窓から出て、他家の屋根に乗り、そして自分の家の大屋根にゆく仕かけだつた。

「売れすぎて損をするつて。」

とお其は告げて、あたしの父を笑わせていた。父の晩酌のお膳の前に座るのを、あたしより前にもつた特権だとこの小娘は信じて疑わなかつた。

お其が私を紹介した買物のはじめは、角の荒物店だつた。足許の箒だの、頭の上からさがつて来ているものを掻きわけて、一間たらずの土間の隅につれてゆくと、並んでいる箱の硝子蓋をとつて中の駄菓子をとれと教えた。当ものをさせて、水絵——濡らしてはると、西洋画風の蝶や花が、刺青のように腕や手の甲につくのを買わせた。で、彼女は一生懸命にお銭の必用と、物品購買のことを説ききかせて、こういう細長い、まん中に

穴のあいているのが天保銭てんぼうせんで、それに丸いので穴のあいてるのを一つつけると、赤く光った一銭銅貨とおなじだと、繰くりかえしていった。でも、あたしにはあんまり必要がなかった。それよりも、お其の紹介で友達になった子たちが、自分の家の裏庭うちでとった、蝸まいま牛いつぶろを焼いてたべさせたりするのを、気味がわるくてもよろこんだ。

この子供仲間は、男の子も女の子もみんな顔色がわるかった。どの子も大きな眼をして痩やせていた。小僧さんかお附きの女中がいるので、それらの眼をしのんで、こつそり集あつまるのを、どんなに楽しみにしていたか知れない。だから裏から裏と歩いた。村田——有名な化粧品問屋——の裏を歩くと、鬢びんつ附け油を練ねる香においで臭く、そこにいる蝸まいまい牛いつぶろもくさいと言った。鍛冶七かじしち——鍛冶もしていた鉄問屋——の裏には、猫ねこ婆ばあがいるということなど、いつの間にか大人おとなよりよく知ってしまった。

猫婆さんは真暗な吹鞆場ふいこばに——その家も大かた鍛冶屋でもあったのであろう。大溝おおとぶが邪魔をして通り抜けられない露路奥ろじおくになつていたので、そんな家のあることも、そんなお婆さんの生いきていることも、ほんとに幾人しかしりはしなかった。ただ猫だけが知つていて、宿無し猫が無数に集つてきていた。いつもお婆さんの廻りは猫ばかりなので、猫ぎらいなあたしは、お婆さんの顔の輪格りんかくもはつきり見知らなかった。

「まだ生てるよ、顔だけあつたもの。」
なぞと、覗のぞいてきては子供たちはいった。

土のお団子だんごなどをこしらえている時に、坊ちゃんうちの一人が目附めけだされて、連れかえられようものなら、その子は家へかえるのを牢獄ろうごくにでもおくられるように号泣した。残されるものもみんなさびしかった。なぜなら、帰ればその子におしおきが待っているからである。なぜ表へ出て、あんな子たちとお遊びなさいました——とそれはまた、各自めいめいの身の上でもあるからなので——

あたしもよく引き摺ずつてゆかれて、お灸きゅうを据えられたり蔵えんの縁へんの下もとに投ほうりこまれたりした。そうした窮屈きうくつな育てられかたをするのはお店たなの坊ちゃん嬢ぢやうちゃんがたで、自由な町の子も多くあつた。それがどんなに羨うらやましかつたらう。そしてその多くの町の子たちが遊びの指導者でもあつたのだが、彼らはよく裏切りもした。あたしの祖母が、あたしの遊びに抜すけだしたのを蔵探げんたん中ちゆう、その子たちの仲間の一人にお小遣こづかいいをくれると、あたしは直すぐにつかまえられた。逃げでもすると、その子たちは追つかけ追おい廻まわして、意地悪いぢあくくとらえて祖母に突き出した。何なにがそんなに遊あそんではいけなのだろう？ 遊あそんでいけないのより、許おゆる可しをうけず外へ出るから、それがいけない、では許可をうければゆるしたか？

なんの、

「いけません、おとなしくお家うちでお遊びなさい。」

である。時たま家中の御機嫌のよい時外へ出して遊ばせてもらう。鬼ごっこ、子をとろ子とろ、雛ひな一丁おくれ、釜かま鬼おに、ここは何処どこの細道ほそみちじゃ、かごめかごめ、瓢ひょう箆うたんぼつくりこ——そんなことをして遊ぶ。

子こを奪とろ子ことろは、親になつたものの帯につらなつて大勢の子がいる。人とり鬼になつたものが、どうにかして末の、尻尾しっぽの方の子をとろうとするのである。親になつたものは、両手をひろげてふせぐ、鬼は、あつちこつちと、両側を狙ねらつて、長い列が右往左往すると、虚を狙ねらつて成功する——その時分、人浚さらいが多くあつて、あたしの従兄いとこも夕方さらわれていったのを、父が木刀をもって駈かけていって、神田弁慶橋かんだべんけいばしで取りかえしたという話もある。そんな遊びもしたのであろう。夕方になると子供を外に出しておくのを危険とした。そんな事で、外出もやかましくいったのかも知れないが——

釜鬼は、塀や壁を後にして、土に半輪はんわを描き、鬼が輪の中に番をしていて、みんな下駄を片つぽずつ奥の方へ並べておく。それをチンチンモガモガをしながら、輪の中へ取りにゆくのである。大挙して突進すると鬼が誰をつかまえようかと狼狽あわてる、それが附目つけめなので

ある。下駄が一ツ二ツ残ると、それからが駈引きで面白く興じるのだ。

——瓢箪ぼっくりこ——つながってしやがんで、両方に体を揺つて歩を進めて、あとの後の千次郎と、唱いながらよぶと、一番後の子が、へエイと返事をして出てくる。問答がすむと、その子がこんどは先頭になるのだ。

雛一丁おくれは、ずらりと子供を並べておいて、売手が一人、買手が一人、節をつけて唄い問答する——

ひな一丁おくれ、

どの雛目つけた。

この雛目つけた、いくらにまけた。

三両にまけた、なんで飯くわす？

赤のまんまくわしよ。

さかな
魚をやるか？

鯛魚くわしよ。

小骨がたあつ、

噛んでくわしよ……

ここは何処どこの細道じやも唄うたうのだ。二人の鬼が手を組んで門をつくり袖たを垂たれている。袖うしろの後に一人の子が隠うされている。訪ねてくるものが、まず唄うたって、鬼がこたえる。

ここは何処の細道じや〜

天神てんじんさま様の細道じや〜

ちつと通してくださいませ〜

御用のないもな通されぬ〜

天神様へ願かけに〜

通りやんせ、通りやんせ。行きはよいよい、帰りはこわい——

袖たもとがあがる、訪ねるものは通つてゆく。こんどは隠された子をつれてくぐりぬけるのに鬼どもはいやというほどなぐろうとする。そうさせまいと走りぬけるのだ。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年2月

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

2012年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旧聞日本橋

町の構成

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>